

# ロンドン大学本『日本館訳語』にみる 独自の用字法をめぐって

蔣 垂 東

キーワード：ウ段とオ段の区別、イ段とエ段の区別、基礎音系、用字法、訂正

## 要 旨

『日本館訳語』の諸本の内、校正本であるロンドン大学本は音訳の面で他本と異なる独自の用字法が少なからず見られる。本稿では、ロンドン大学本のみに見られるそうした用字法について、

- (1)独自の用字法は徹底されていないものの、その多くの用例には、混同しがちなウ段とオ段などの音訳をより明確にするための意図が認められる
- (2)独自の用字法が施された用例には、(1)の意図に反するものも含まれているという2点を明らかにする。これを通して、ロンドン大学本の一側面を解明する。

## 0. 問題の所在

三種本『華夷訳語』に含まれている『日本館訳語』は、明の会同館において通事養成のための教科書として編集された中国語と日本語との対訳集である(注1)。成立年代は未詳だが、ロンドン大学本(以下ロンドン本と略す)に嘉靖二十八年(1549)に校正を試みたという識語があることから、1549年が成立の下限とされている。この書では、天文、地理など18の門に分類された566の見出し漢語が掲げられ、それにあたる日本語が漢字(中国語音)で示されている。音訳されたこれらの日本語は日本語史の資料として重視されている。

『日本館訳語』については刊本の存在が報告されておらず、現存諸本はいずれも写本である。代表的なものとして、ロンドン本、静嘉堂文庫本(以下静嘉堂本と略す)、阿波国文庫本(以下阿波国本と略す)、稲葉君山旧蔵本(以下稲葉本)の四本がある(注2)。四本の内、「最古の善写本」(福島1968:p. 224)とされるロンドン本は明代の中国の写本で、他の三本はいずれも江戸時代の日本の写本である。

四本の内、ロンドン本と阿波国本は共に566項目を収録しているのに対し、静嘉堂本は花木門に1項目、稲葉本は器用門から人物門にかけて23項目が欠落している(注3)。また、門によっては訳語の配列の順序に若干の違いが見られるものの、門の名称や門ごとの収録語数(静嘉堂本と稲葉本の欠落部分を除く)は一致している。また、内容面(見出し漢語と音訳された日本語)でも、四本のそれぞれに誤脱が見られるが、大差はない。

四本の内、校正本であるロンドン本が、他の三本との間に少なからぬ違いを有している

ことはすでに多くの先行研究によって指摘されている。そうしたロンドン本と他の三本との主な違いを整理すると以下ようになる。

- (1) 名称が異なること。ロンドン本の名称は、冒頭で『日本国訳語』、末尾で『日本訳語』となっているのに対し、他の三本は首尾とも『日本館訳語』である。
- (2) 識語があること。ロンドン本の書末には、「嘉靖二十八年十一月望通事序班胡澆 褚效良 楊宗仲校正」という識語があるのに対し、他の三本には編者や成立年代などを示す識語がない(注4)。
- (3) 独自の用字法があること。四本のそれぞれに音訳漢字を中心として誤字、脱字、倒錯などが認められる例が存在するが、ロンドン本にはそうした誤記、誤脱とは見せない例が見られる。例えば、「モ」の音訳漢字として、他本は専ら「木[*mu*]」を使っているのに対し、ロンドン本では、「木」に代わって、他本にない「莫[*muo*]」を使う用例も見られる。同様な現象は「ト、ミ」などの音訳漢字にも認められている。また、同じ音訳漢字で他本と異なる用法が見られる例もある。例えば、「乃[*nai*]」は各本を通じて、「ナイ・ナ」の音訳に用いられているが、ロンドン本にはこのほか「ノ」の音訳に用いられた例も存在する。

上記(1)～(3)については、大友(1963, 1968)、福島(1968, 1993)、蔣(1996)などによってかなりの部分が解明されてきた(注5)。

(1)の名称については、福島(1968)が、「ロンドン本では各訳語の呼称は統一されておらず、朝鮮館、日本国などとあり、しかも末尾では、日本訳語となっており、従来のように『館』をつけた呼称も一の呼称にすぎないことが分かる(p. 222)」「静嘉堂本の訳語の呼称は、日本館のように館名をつけるものと、安南訳語、占城訳語のように館名をつけないものとある(p. 229)」と指摘している。阿波国本と稲葉本についても同じことが言える。阿波国本と稲葉本では、『朝鮮館訳語』『琉球館訳語』『日本館訳語』『畏兀兒館訳語』『暹羅館訳語』『満刺加館訳語』『百夷館訳語』のように「館」をつける名称がある一方、『安南訳語』『占城訳語』『韃靼訳語』『西番訳語』『回回訳語』『女直訳語』のように「館」をつけないものもある。但し、「国」をつけるのはロンドン本だけである。

(2)の識語については、蔣(1996)が指摘したように、ロンドン本の識語に出ている校正者の役職名「通事序班」と人名「胡澆 褚效良 楊宗仲」は『大明会典』や『策彦和尚再渡集』など中日双方の当時の記録によって裏付けを得ることが可能であり、不明な点が多い同書の成立事情を推知できる重要な手掛かりである。

(3)の独自の用字法については、大友(1963, 1968)、福島(1968, 1993)などの先行研究に取り上げられたことがあるが、そうした独自の用字法は何の目的でなされたのか、また、独自の用字法が施された用例は全て適切なものかどうかといった点が必ずしも明らかにさ

れていないが、音韻資料として無視できないものである。

そこで本稿では、特に(3)の問題点を取り上げて検討をしたい。

## 1. ロンドン本の異文

ロンドン本独自の用字法について考察する前に、次の表1に示すロンドン本と他本との異文全体を概観しておく必要がある。

表1 ロンドン本の異文（下線は異文の該当部分を示す）

	分類	丁数	通し番号	門別	見出し漢語	異文	
						ロンドン本	他本
1	I	5ウ	175	花木	山藥	牙馬那亦莫 <small>ヤマノイモ</small>	山藥
2		7ウ	260	器用	蓬	賀 <small>ホ</small>	蓬(静)、蓬(阿・稻)
3		14ウ	511	声色	浅緑	阿撒撒莫容急 <small>アササモコウ</small>	浅緑
4	II	9オ	309	人物	子	本司各 <small>ムスコ</small>	木司各 <small>ムスコ</small>
5		9オ	310	人物	女	本司也 <small>ムスメ</small>	木司也 <small>ムスメ</small>
6		11ウ	410	身体	舌	世谷 <small>シヤ</small>	世答 <small>シヤ</small>
7		15オ	527	数目	七十	世谷柔 <small>シヤジヨ</small>	世只柔 <small>シヤジヨ</small>
8		2ウ	66	地理	河窄	嗑哇斜巴法 <small>カワセバシ</small>	嗑哇斜巴世 <small>カワセバシ</small>
9		9ウ	330	人物	老人	都世的約的 <small>トシノヨツヂ</small>	都世那約的 <small>トシノヨツヂ</small>
10	III	13ウ	476	珍宝	鉄	禄谷嗑聶 <small>ロクカネ</small>	谷禄嗑聶 <small>クロカネ</small>
11		15ウ	542	方隅	後	吾禄世 <small>ウジロシ</small>	吾世禄 <small>ウジロシ</small>
12	IV	1ウ	34	天文	天涼	唵喇乃孫司口 <small>ソラノスズ</small>	唵喇那孫司世 <small>ソラノスズシ</small>
13		3ウ	105	時令	七月	世只哇口 <small>シヤジワ</small>	世只哇的 <small>シヤジワ</small>
14	V	7ウ	255	器用	盤	撒幹都急 <small>サカヅキ</small>	倭世急 <small>オシキ</small>
15	VI	5ウ	176	花木	砍柴	乞望尼里	乞急尼里(静、阿) 乞急厄里(稻)
16	VII	1オ	13	天文	天晴	唵喇那法里口 <small>ソラノハレ</small>	唵喇那法里的 <small>ソラノハレテ</small>
17		5オ	163	花木	小麦	各不急 <small>ゴウキ</small>	各木急 <small>ゴウキ</small>
18		9ウ	341	人物	富人	答那世那非多 <small>タナジノヒト</small>	答那世 非都 <small>タナジノヒト</small>
19	VIII	4オ	123	時令	晚	非那谷禄答 <small>ヒノクレタ</small>	非那谷里答 <small>ヒノクレタ</small>
20		4ウ	149	花木	竹筍	答傑那各 <small>タケノコ</small>	答傑那谷 <small>タケノコ</small>
21		14オ	504	声色	紅	阿嗑撒 <small>アカサ</small>	阿盖撒 <small>アカサ</small>
22		16オ	561	通用	慢	申都盖聶 <small>シツガニ</small>	申都嗑聶 <small>シツガニ</small>

23	IX	1才	9	天文	霜	世莫 <sup>シモ</sup>	世木 <sup>シモ</sup>	
24		1ウ	33	天文	天下	唼喇乃世莫 <sup>ソラノシモ</sup>	唼喇乃世木 <sup>ソラノシモ</sup>	
25		2ウ	68	地理	挑水	民足莫都 <sup>ミツモツ</sup>	民足木都 <sup>ミツモツ</sup>	
26		3才	84	地理	山下	牙馬那世莫 <sup>ヤマノシモ</sup>	牙馬那世木 <sup>ヤマノシモ</sup>	
27		4才	126	花木	桃	莫莫 <sup>モモ</sup>	木木 <sup>モモ</sup>	
28		4ウ	139	花木	葱	非都莫世 <sup>ヒトモジ</sup>	非都木世 <sup>ヒトモジ</sup>	
29		5ウ	175	花木	山楽	牙馬那亦莫 <sup>ヤマノイモ</sup>	牙馬那亦木 <sup>ヤマノイモ</sup>	
30		10ウ	371	人事	忙	非馬莫乃 <sup>ヒマモナイ</sup>	非馬木乃 <sup>ヒマモナイ</sup>	
31		13才	452	飲食	餅	牙急莫只 <sup>ヤキモチ</sup>	牙急木只 <sup>ヤキモチ</sup>	
32		13才	469	飲食	斟酒	撒急莫的急答里 <sup>サケモツテキタリ</sup>	撒急木的急答里 <sup>サケモツテキタリ</sup>	
33		14ウ	508	声色	緑	莫容急 <sup>モヨギ</sup>	木容急 <sup>モヨギ</sup>	
34		14ウ	511	声色	浅緑	阿撒撒莫容急 <sup>アササモヨギ</sup>	阿撒撒木容急 <sup>アササモヨギ</sup>	
35		15ウ	554	通用	下	世莫 <sup>シモ</sup>	世木 <sup>シモ</sup>	
36		13才	463	飲食	喫酒	撒急吾莫里唼 <sup>サケオマリソ</sup>	撒急吾莫里唼 <sup>サケオマリソ</sup>	
37		9才	317	人物	客人	馬羅多世 <sup>マラクトシ</sup>	馬羅都世 <sup>マラクトシ</sup>	
38		9ウ	327	人物	大人	倭亦非多 <sup>オオイヒト</sup>	倭亦非都 <sup>オオイヒト</sup>	
39		9ウ	331	人物	少人	阿盖非多 <sup>ワカイヒト</sup>	阿盖非都 <sup>ワカイヒト</sup>	
40		9ウ	339	人物	貧人	非老世那非多 <sup>ヒラウシノヒト</sup>	非老世那非都 <sup>ヒラウシノヒト</sup>	
41		9ウ	340	人物	従人	吾只那非多 <sup>ウチノヒト</sup>	吾只那非都 <sup>ウチノヒト</sup>	
42		9ウ	341	人物	富人	答那世那非多 <sup>タノシノヒト</sup>	答那世那非都 <sup>タノシノヒト</sup>	
43		2才	71	地理	雪厚	由急阿多亦 <sup>ユキアツイ</sup>	由急阿都亦 <sup>ユキアツイ</sup>	
44		12ウ	448	飲食	醬	米宿 <sup>ミツツ</sup>	匕宿 <sup>ミツツ</sup>	
45		2ウ	59	地理	国	谷泥 <sup>クニ</sup>	谷尼 <sup>クニ</sup>	
46		2ウ	67	地理	地方	谷泥 <sup>クニ</sup>	谷尼 <sup>クニ</sup>	
47		13才	460	飲食	花椒	三肖 <sup>サンショウ</sup>	三燒 <sup>サンショウ</sup>	
48		X	3才	81	地理	大路	倭吾亦那密祭 <sup>オオイノミチ</sup>	倭亦那密祭 <sup>オオイノミチ</sup>
49			7才	233	宮室	大門	倭吾亦捫那 <sup>オオイモン</sup>	倭亦捫那 <sup>オオイモン</sup>
50			16才	559	通用	大	倭吾亦 <sup>オオイ</sup>	倭亦 <sup>オオイ</sup>
51			15ウ	556	通用	薄	吾司亦 <sup>ウスイ</sup>	吾唼亦 <sup>ウスイ</sup>
52			1ウ	32	天文	天上	唼喇乃嗑密 <sup>ソラノカミ</sup>	唼喇那嗑密 <sup>ソラノカミ</sup>
53			1ウ	33	天文	天下	唼喇乃世莫 <sup>ソラノシモ</sup>	唼喇那世木 <sup>ソラノシモ</sup>
54		1ウ	34	天文	天涼	唼喇乃孫司口 <sup>ソラノスズ</sup>	唼喇那孫司世 <sup>ソラノスズ</sup>	

(\* 丁数と通し番号はともに『纂修日本訳語』所収のロンドン本による)

Iは、見出し語に誤字が認められる例である。「山樂」と「浅祿」はロンドン本のみに見られるが、第二例器用門の「賀」(帆の意)という訳語の見出し漢語は、阿波国本と稲葉本も「蓬」となっている。静嘉堂本だけは「篷」となっている。

IIは、音訳漢字に誤字が認められる例である。4~7は類似の字によるものであるのに対し、8と9は前後の字に引きずられたものと考えられる。

IIIは、音訳漢字に倒錯が認められる例である。

IVは、音訳漢字に脱字が認められる例である。

Vでは、ロンドン本255「盤 撒幹都急」の音訳は他本と完全に異なっているが、直前の254「鍾 撒幹都急」の音訳を繰り返して写したのと考えられる。

VIでは、ロンドン本は「乞望尼里」、静嘉堂本と阿波国本は「乞急尼里」、稲葉本は「乞急厄里」といった具合で異文が多く、先行研究の見方も分かれている。伊波(1932:p. 57)は稲葉本に従って「キキヤリ」と読んでいる。渡辺(1961:p. 21)は、静嘉堂本に従って、「キキニリ?」としている。大友(1963:p. 296)は、静嘉堂本の「乞急尼里」が「乞急里尼」とあるべきとして「キキリニ」と読んでいる。これに対し、福島(1968:p. 302, 1993:p. 339)は未解説としている。「乞望里尼」では、「里[li]」と「尼[ni]」は他にも用例が見られ、それぞれ「リ」と「ニ」の音訳に多用されているのに対し、「乞」と「望」はこれ以外の用例が見当たらない。「乞[ki]」を「キ」と読むのに問題はなさそうであるが、「望[Quang]」の読み方は問題を含んでいる。なぜなら、「望」のような鼻音韻尾を有する音訳漢字には二通りの用法が考えられるからである。即ち、撥音の直前の音節(111「幾年 <sup>ナンケン</sup> 南念」)に用いられる場合と、濁音節(ガ・ザ・ダ・バ行)直前の音節(238「筆 <sup>フデ</sup> 分貼」)の音訳に用いられる場合があるということである。このように、「乞望里尼」は多くの問題を抱えており、今後の課題としたい。

VIIは、音訳が他本とは異なっているが、日本語として、または同書の音訳法から見て誤りとは言えない例である。

- ・「唵喇那法里」は、直前の「天陰 唵喇那枯木<sup>ツ</sup>的」との対比から、「ソラノハレテ」の「て」(助詞)が欠落したと見ることが可能だが、「て」がなくても、日本語としては問題がない。
- ・「各<sup>コフ</sup>不<sup>ギ</sup>急」は、133「表 木<sup>ム</sup>急」や163「大表 倭木<sup>オホムギ</sup>急」などの例からは、「不」を「木」の誤写と見なすことが可能である。しかし、各本を通じて124「冷 三<sup>サフ</sup>不<sup>フ</sup>世」362「睡年<sup>ネフ</sup>不<sup>フ</sup>立」141「茄 納宿<sup>ナス</sup>密」などのような、マ行音とバ行音の交替例が見られるので、誤写かどうか速断を避けたい。
- ・「答那世那非多」の「那」は、他本に見られないものである。形容詞の連体形に「那」をつけるのは問題だが、各本を通じて36「白雲 世祿亦那枯木」37「黒雲 谷祿亦那枯木」339「貧人 非老世那非多」のような例が複数見られる。従って、「答那世那非多」は『日本館訳語』の音訳法からは誤ってはいないと言える。

VIIIは、同じ用法をもつ音訳漢字を置き換えた例である。「非<sup>ヒ</sup>那<sup>ナ</sup>谷<sup>ク</sup>禄<sup>ク</sup>答<sup>カ</sup>」「答<sup>タ</sup>傑<sup>ケ</sup>那<sup>ノ</sup>各<sup>コ</sup>」「阿<sup>ア</sup>嗑<sup>カ</sup>撒<sup>サ</sup>」  
「申<sup>シ</sup>都<sup>ツ</sup>蓋<sup>カ</sup>竊」では、「レ・コ・カ」音訳漢字が他本のととは異なっている。

- ・「禄[lu]」は主にルカロの音訳に用いられている音訳漢字で、「レ」の音訳に用いられるのは極めてまれであるが、各本を通じて372「生<sup>ウ</sup>吾<sup>マ</sup>馬<sup>レ</sup>禄<sup>カ</sup>貼」との例も見られるので、誤りとは断断できない。ただし、2例とも動詞の例で、要注意である。
- ・「各」と「谷」は、各本を通じて共に「コ」の音訳に用いられているので、共通の方法もあれば、字体も類似している。ただし、用例数から見て、「各」は主に「コ」の音訳に用いられているのに対し、「谷」は「ク」の方に多用されている。
- ・「嗑」と「蓋」は共に「カ」の音訳漢字として用いられているが、用例数から見て「嗑」の方が圧倒的に多い。

「禄」と「里」、「各」と「谷」、「嗑」と「蓋」は、用例数に差が認められるものの、同じ用法をもつ音訳漢字同士であるため、意図的に使われたかどうか判断が難しい。

なお、同じことは他本にも見られる。例えば、静嘉堂本では、「各」が「谷」に変えられた例が目立つ他、「里」が「立」に変えられた例もある。また、阿波国本や稲葉本系のテキストでも、「各」が「谷」に、「嗑」が「蓋」に変えられた例が見られる。

IXの各例では、「莫」「多」「米」「泥」「肖」が「木」「都」「乚」「尼」「焼」の代わりに用いられている。これらは、いずれも他本では使われていない音訳漢字であり、しかも解読可能である。

他本においても独自の音訳漢字の用例は少なくはない。例えば、阿波国本や稲葉本系のテキストでは、178「虎<sup>ト</sup>刺<sup>カ</sup>」(他本は「它喇」)の「刺」(1例)は他本にない音訳漢字であり、静嘉堂本の「雷<sup>ル</sup>納<sup>カ</sup>禄<sup>カ</sup>嗑<sup>カ</sup>蜜」(他本は「納禄嗑蜜」)の「蜜」(2例)と「臭<sup>ク</sup>姑<sup>カ</sup>撒<sup>カ</sup>撒」(他本は「枯撒撒」)の「姑」(1例)も独自の音訳漢字である。いずれも解読可能である。しかし、「刺」「蜜」「姑」はそれぞれ、「喇」、「密」、「枯」に字体が類似しており、特定の意図に基づいたものではないことが明らかである。

Xでは、「倭吾」「司」「乃」は音訳漢字としては他本においても用いられているが、ロンドン本のみ用法が認められる例である。

上記I～Xの内、I～Vに見られる、書写の際に生じたと思われる例は、次の表2に示すように、他本においても多く見られ、特にロンドン本に多い訳ではない。表2では、「見出し語の誤写・倒錯」「音訳漢字の誤写・倒錯」「部分脱字」「項目欠落」は上述のI～Vに該当する明らかな誤脱である。VIは前述の通りテキストによって異文が多く、各本を通じて解読に困難のある訳語であるので、表に入れていない。また、「字体類似」は上述の「蜜」「姑」「刺」に該当するもので、VII～VIIIとともに、書写の際に生じたと思われるが、誤りとは言えない例である。VIIIとXの用例はI～VIIによって説明できないもので、ロンドン本の独自の用字法に基づいたものとして次節で詳しく考察する。

表2 各本別Ⅰ～Ⅴ、Ⅶ～Ⅷ該当例の数

	見出し語の 誤写・倒錯	音訳漢字の 誤写・倒錯	部分 脱字	項目 欠落	小計	字体 類似	Ⅶ	Ⅷ	合計
ロンドン本	3	9	2		1		3	4	21
静嘉堂本	2	8	2	1	1	3		9	25
阿波国本	14	9	1		2	1		2	27
稲葉本	27	28	3	23	8	1		4	86

## 2. ロンドン本の独自の用字法の分析

前述のⅨ、Ⅹに見られるロンドン本の独自の用字法については、次のようないくつかの先行研究によって取り上げられたことがある。大友(1963:pp. 343～344)は、

ロンドン本によれば、…中略…「も」に宕摂鐸韻の「莫」、「と」に果摂歌韻の「多」、「に」に蟹摂齊韻の「泥」、「み」に蟹摂薺韻の「米」、「せう」に效摂笑韻の「肖」が用いられている。これらは、…中略…それぞれに音注するのに正に妥当なものばかりである。しかも、ここで注目すべきは、今迄取り扱った静嘉堂本では、「む」と「も」とを同一の「木」で、「つ」と「と」とを同一の「都」で音注していたのに対し、このロンドン本では、「木」を専ら「む」に当てて「莫」を「も」に当て、「都」を専ら「つ」に当てて「と」に「多」を用いており、さらに静嘉堂本では、「ぬ」と「の」に「那」を当てていたのに、これでは「の」に「乃」を用いているのであって、それらの音注振りは、国語に極めて忠実なものといえる。

と述べている。また、大友(1968:p. 49)には、

ロンドン本では、「も」に「莫」、「の」に「乃」、「に」に「泥」、「おおい」に「倭吾亦」、「と」に「多」を新たに音注している点で、「日本館訳語」に関する限りでは、静嘉堂本系の方が古さを保ち、一方、ロンドン本には新しい要素が加わっている事が解る。

との指摘もある。これに対し、福島(1993:pp. 107～109)は、ロンドン本における「木：莫」「那：乃」「尼：泥」「都：多」の用法を検証した上、

「乃」が新しい要素で良くないというのも、わからないことである。—中略—「木」「莫」優劣論と同じように、「都」「多」の優劣も決めがたい。

と述べ、大友説に反対する立場をとっている。

このように、ロンドン本の独自の用字法については先行研究で触れられたことがあるが、本論筆者とは解釈が異なるので、以下では用例を逐一再検討し、新たな解釈を提示したい。

表3で示すように、『日本館訳語』の音訳漢字では、唇音性母音をもつウ列とオ列の区別が明確ではない。また、蔣(1997)によると、前寄りの母音をもつイ列とエ列についても、表4で分かるように、ウ列とオ列ほど混同が激しくないが、しばしば曖昧になるケースが見られる。その原因は当時の中国北方方言の音韻体系では、日本語の u:ɔ(注6)、i:e のような対立がなかったため、北方方言の話し手にとってその区別がしにくかったからだと考えられる。ロンドン本に見られる独自の用字法の多くは、そのような曖昧になりがちなウ列とオ列、イ列とエ列の音訳を区別しようとした結果とみることができる。

## 2.1. ウ列とオ列に関連する用例

### 2.1.1. 「莫」の場合

「莫[muo]」はロンドン本でしか使われない音訳漢字で、主として「モ」の音訳に用いられている。表2で分かるように、その用例は最初の天文門から最終の通用門まで広く分布している。

表3 『日本館訳語』におけるウ、オ列の音訳漢字 (括弧内は延べ用例数)

ウ列の音訳漢字		オ列の音訳漢字	
ウ 吾 [ɔu] (26) 翁 [ɔuŋ] (3) 文 [ɔuən] (1)		オ 倭 [ɔuo] (8+3) 吾 [ɔu] (8+3) 文 [ɔuən] (2)	
ク 谷 [ku] (55) 枯 [k'u] (8) 各 [kɔ] (3) 公 [kuŋ] (2)		コ 各 [kɔ] (23) 谷 [ku] (7) 空 [k'uŋ] (1)	
		ゴ 各 [kɔ] (4) 驚 [ɔɔ] (3) 倭 [ɔuo] (1) 翁 [ɔuŋ] (1)	
ス 司 [sɪ] (22-1) 宿 [su] (2) 索 [suo] (2) 寺 [sɪ] (1) 唆 [suo] (2+1) 孫 [suən] (3)		ソ 唆 [suo] (14) 宿 [su] (1) 孫 [suən] (1)	
ズ 司 [sɪ] (3)			
ツ 都 [tu] (14+1) 讀 [tu] (4) 足 [tsu] (4) 祖 [tsu] (1) 禿 [t'u] (1) 司 [sɪ] (1) 多 [tuo] (1) (口)		ト 都 [tu] (16+6) 它 [t'uo] (4) 讀 [tu] (1) 多 [tuo] (6) (口)	
ヅ 足 [tsu] (9) 都 [tu] (6)		ド 都 [tu] (1)	
ヌ 那 [nuo] (3)		ノ 那 [nuo] (96) 乃 [nai] (3) (口) 納 [na] (1) 農 [nuŋ] (2)	
フ 福 [fu] (15) 夫 [fu] (3) 分 [fiun] (3)		ホ 波 [puo] (5) 活 [huo] (3) 賀 [hɔ] (1) 夫 [fu] (1)	
ブ 不 [pu] (12) 福 [fu] (1) 波 [puo] (1)			
ム 木 [mu] (9) 母 [mu] (1)		モ 木 [mu] (19+14) 莫 [muo] (14) (口)	
ユ 由 [ɔiəu] (10) 魚 [ɔy] (1)		ヨ 約 [ɔiɔ] (10) 容 [ɔiuŋ] (2)	
ル 禄 [lu] (32)		ロ 禄 [lu] (24) 羅 [luo] (6)	

(\* (口)はロンドン本のみに見られる音訳漢字) (\*\* +数値と-数値はロンドン本の用例数)

(\*\*\* 推定音は陸志韋(1947)に従う。以下同様)



『日本館訳語』では、「モ」は延べ33例認められ、ロンドン本以外の諸本では、その音訳漢字として、専ら「木[mu]」が使われているのに対し、ロンドン本では全33例の内、9「霜 世莫」33「天下 唼喇乃世莫」68「挑水 民足莫都」84「山下 牙馬那世莫」126「桃 莫莫」139「葱 非都莫世」175「山樂 牙馬那亦莫」371「忙 非馬莫乃」452「餅 牙急莫只」469「斟酒 撒急莫的急答里」508「緑 莫容急」511「浅緑 阿撒撒莫容急」554「下 世莫」の14例に、「木」の代わりに「莫」が使われている。6「雲 枯木」14「天陰 唼喇那枯木的」35「黄雲 急密撒那枯木」36「白雲 世禄亦那枯木」37「黒雲 谷禄亦枯木」109「十一月 世木讀急」155「菓子 木那哇」213「水鴨 民足並木」325「自隸 世木別」347「裁縫匠 急那木撒亦谷」385「方物 木那哇」399「賞賜 非近的木那」415「腰 世木」423「衣 急那木那」429「綿布 木綿」436「舗盖 世近木那」441「皮襖 嗑哇急那木那」442「手巾 貼那急那木那」の19例に、他本と同じ「木」が使われている。

表3で分かるように、ロンドン本以外のテキストでは、「モ」の音訳に「木」しか使われていない。しかも、この「木」は、「ム」全10例の内9例、58「村 木喇」132「麦 木急」162「大麦 倭木急」163「小麦 各木急」247「蓆 木世禄」309「子 木司各」310「女 木司也」333「女婿 木各」393「鞠躬 各世各各木」の音訳にも用いられている。残りの1例509「紫 母喇撒急」も「木」と声母も韻母も同じ「母」が用いられている。即ち、ロンドン本以外のテキストでは、「ム」と「モ」の区別が全くなされていないということである。一方、ロンドン本では、33例の「モ」の内、「莫」が四割を越す14例に使われたことによって、「ム」と「モ」との区別は不完全ながらも程度なされるようになった。従って、ロンドン本の方が音訳が改善されたと言える。

また、上掲の表3において次のような現象を見ることができる。ウ列の音訳には、韻母=[uo]の字の用例も見られるものの、韻母=[u]の字が圧倒的に多く用いられている。一方、オ列の音訳には主に韻母=[uo]の字が用いられているが、韻母=[u]の字の用例も「モ」「ト」を中心に少なからず見られる。混同はあるものの、ウ列には韻母=[u]の字を、オ列には韻母=[uo]の字を用いるという使い分けの傾向が一応見てとれる。「モ」の音訳に「木」の代わりに「莫」を用いたロンドン本の用字法は、この傾向に合致するものである。

### 2.1.2. 「多」の場合

「多[tuo]」も他本で見られない音訳漢字である。ロンドン本では主として「ト」の音訳に用いられている。その用例の全ては人物門に集中している。

表3が示すように、「ト」は延べ27例認められ、他本では、「都[tu]」が22例、「讀[tu]」が94「時 讀急」に1例、「它[t'uo]」が、178「虎 它喇」189「鷄 它立」211「野鷄 斤只那它立」485「琥珀 它喇那答馬」の4例に使われている。「都」「讀」と「它」との韻母の違いが目されるべきである。一方、ロンドン本では、「它」と同じ韻母=[uo]をもつ「多」が、317「客人 馬羅多世」327「大人 倭亦非多」331「少人 阿盖亦非多」339

「貧人 <sup>ヒラウシノヒト</sup> 非老世那非多」340 「従人 <sup>ウチノヒト</sup> 吾只那非多」341 「富人 <sup>タノシノヒト</sup> 答那世那非多」の6例に用いられている。そのため、「都」の用例が、139 「葱 <sup>ヒトモジ</sup> 非都莫世」91 「年 <sup>トシ</sup> 都世」95 「今年 <sup>コトシ</sup> 各都世」205 「鶴鴿 <sup>ハト</sup> 法都」297 「佛像 <sup>ブツゾウ</sup> 福都傑」307 「弟 <sup>イモ</sup> 吾都都」311 「人 <sup>ヒト</sup> 非都」318 「官人 <sup>トノバラ</sup> 都那巴喇」322 「土官 <sup>ドクワン</sup> 都貫」330 「老人 <sup>トシノヨシ</sup> 都世那約的」332 「丈人 <sup>シウトウヂ</sup> 受都貼貼」334 「朋友 <sup>トモダチ</sup> 都門答只」336 「好人 <sup>ヨイヒト</sup> 約亦非都」338 「悪人 <sup>ワルイヒト</sup> 哇祿亦非都」386 「法度 <sup>ハツトグ</sup> 巴都各」の16例へと減少した。

表3で分かるように、「都」は、各本を通じて「ツ」(全26例の内の14例)の音訳にも使われているため、上記の「ム」「モ」の場合と同様、ロンドン本以外のテキストでは「ツ」と「ト」との区別が困難である。ロンドン本では「多」が使われた結果、「它」と合わせて韻母=[uo]をもつ音訳漢字の用例が全体の四割近くに達し、不完全ながら他本より「ツ」と「ト」との区別がなされるようになった。ロンドン本のこうした「多」の用法は上述のウ列とオ列の使い分けの傾向に一致するものである。

ロンドン本では、「莫」「多」が使われた結果、他本では区別されない「ム」と「モ」、「ツ」と「ト」の音訳はロンドン本ではある程度区別されるようになった。しかし、決して前掲の先行研究のいう『木』を専ら『む』、『都』を専ら『ツ』に当てる」という状況ではない。なぜなら、ロンドン本では、「木」と「都」がそれぞれ「モ」にも「ト」にも最も多く用いられる事実は依然として残っているからである。

なお、ロンドン本では、「莫」は「モ」の他に飲食門の463 「喫酒 <sup>サケオマイリン</sup> 撒急吾莫里唆」(他本は「喫酒 <sup>サケオマイリン</sup> 撒急吾馬里唆」)にも1例使われている。「莫[muo]」を「マ(イ)」の音訳に用いることを問題にしなければならない。

「多」も「ト」の他に、天文門の71 「雪厚 <sup>ユキアツイ</sup> 由急阿多亦」(他本は「雪厚 <sup>ユキアツイ</sup> 由急阿都亦」)に1例使われている。「多」を「ツ」に用いたのは、結果的に「ト」と「ツ」の音訳を区別しようとする意図に反する行き過ぎた訂正と言わざるを得ない。

### 2.1.3. 「司」の場合

556 「薄 <sup>ウスイ</sup> ～(ウスイ)」の音訳では、他本の「吾唆亦」に対し、ロンドン本は「吾司亦」となっており、「ス」の音訳漢字が異なっている。

韻母=[uo]をもつ「唆」は、1 「天 <sup>ソラ</sup> 唆喇」13 「天晴 <sup>ソラノハレ</sup> 唆喇那法里(的)」42 「好月亮 <sup>ツ</sup> 讀 <sup>キョクソノ</sup> 急約唆羅」361 「坐 <sup>オリ</sup> 吾里唆」376 「與 <sup>ヨ</sup> 答毛里唆羅」397 「興 <sup>オク</sup> 吾答的唆亦」457 「喫 <sup>オマイ</sup> 吾馬里 <sup>ソ</sup> 唆」463 「喫酒 <sup>サケオマイリン</sup> 撒急吾莫里唆」に見られるように、圧倒的に「ソ」に用いられる音訳漢字だが、他本では、「ス」(38 「雪薄 <sup>ユキウスイ</sup> 由急吾唆亦」556 「薄 <sup>ウスイ</sup> 吾唆亦」)にも2例用いられている。これに対し、ロンドン本ではそのうちの1例(「薄 <sup>ウスイ</sup> 吾司亦」)が「唆」から、「司」に改められている。

表3で分かるように、「司[sɪ]」と「唆[suo]」はそれぞれ「ス」と「ソ」に最もよく用いられる音訳漢字である。こうした用法から考えると、「吾司亦」で「唆」の代わりに「司」

を用いたのは、上記の「莫」「多」の場合と同様、オ列とウ列の音訳の区別を明確になされるものにするためであると考えることができる。従って、この場合も「司」を用いたロンドン本の音訳の方が改善されたと言える。しかし、こうした工夫はここでも徹底されておらず、2例の内の1例に止まっている。

## 2.2. イ列とエ列に関連する用例

### 2.2.1. 「米」の場合

「米 [mi]」はロンドン本にしか使われていない音訳漢字である。

448「醬(ミソ)」の音訳は、他本の「醬 <sup>ミソ</sup> 乚宿」に対し、ロンドン本は「醬 <sup>ミソ</sup> 米宿」となっており、「ミ」の音訳漢字が異なっている。

表4で分かるように、ロンドン本では、「乚 [mie]」は専ら「メ」に用いられている。ロンドン本以外のテキストでも、「乚」は「メ」以外に用いられる例は、この1例しかない(注7)。同書におけるイ列には主に韻母=[i]の字、エ列には主に韻母=[ie]の字を使うという用字法の傾向から見て、「ミ」に「米 [mi]」をあてたロンドン本の音訳の方がより適切であることは明らかである。

表4 『日本館訳語』におけるイ列とエ列の音訳漢字 (括弧内は延べ用例数)

イ列の音訳漢字		エ列の音訳漢字	
イ 亦 [ŋi] (65)	衣 [ŋi] (1)	エ 也 [ŋie] (6)	葉 [ŋie] (3)
盈 [ŋiŋ] (1)			
キ 急 [ki] (62)	近 [kin] (4)	斤 [kin] (1)	ケ 傑 [kie] (5)
急 [ki] (10)			急 [ki] (8)
シ 世 [ʃi] (102)	升 [ʃian] (1)		ゲ 傑 [kie] (1)
申 [ʃian] (1)	習 [si] (1)		急 [ki] (1)
ジ 世 [ʃi] (3)	日 [ʒi] (2)		セ 斜 [sie] (4)
チ 只 [tʃi] (27)	的 [ti] (12)		ゼ 熱 [ʒie] (1)
祭 [tsi] (10)	齊 [ts'i] (3)		節 [tsie] (6)
ヂ 只 [tʃi] (1)			テ 貼 [t'ie] (11)
ニ 尼 [ni] (11+2)	寧 [niŋ] (1)		的 [ti] (6)
聶 [nie] (1)	泥 [ni] (2) (ロ)		
ヒ 非 [fi] (32)	分 [fiun] (4)		デ 貼 [t'ie] (4)
ビ 必 [pi] (49)			的 [ti] (2)
ミ 密 [mi] (52)	民 [min] (10)		ネ 聶 [nie] (21)
米 [mi] (1) (ロ)	乚 [mie] (1) (他)		年 [nien] (1)
リ 立 [li] (14)	里 [li] (12)		へ なし
			ベ 別 [pie] (6)
			メ 乚 [mie] (18)
			密 [mi] (7)
			レ 里 [li] (1)

(\* (ロ)はロンドン本のみに見られる音訳漢字)

(\*\* (他)はロンドン本になく、それ以外のテキストに見られる音訳漢字)

## 2.3. その他の用例

### 2.3.1. 「倭吾」の場合

『日本館訳語』では、「オオ(大)～」は延べ11例あり、他本では、11例全てに「倭 [uo]

が用いられている。これに対し、ロンドン本では、81「大路 <sup>オオ</sup>倭吾亦那密察」233「大門 <sup>オオ</sup>倭吾亦捫那」559「大 <sup>オオ</sup>倭吾亦」の3例に他の三本と異なる「倭吾 [uo]」が、11「大風 <sup>オオ</sup>倭亦刊節」17「大雨 <sup>オオ</sup>倭亦阿密」25「雪大 <sup>オオ</sup>倭亦由急」31「星多 <sup>ホシ</sup>波世倭亦」162「大表 <sup>オオ</sup>倭木急」327「大人 <sup>オオ</sup>倭亦非多」368「多 <sup>オオ</sup>倭亦」510「大紅 <sup>オオ</sup>倭亦阿蓋撒」の8例に他本と同じ「倭」が用いられている。

「倭」は、ロンドン本以外のテキストでは、60「岸 <sup>オカ</sup>倭嗑」85「扇面 <sup>アウ</sup>阿翁急嗑倭」169「榆樹 <sup>イ</sup>亦倭那急」194「魚 <sup>イ</sup>亦倭」313「我 <sup>オ</sup>倭立各」316「婦人 <sup>オ</sup>倭南各」403「面 <sup>オ</sup>嗑倭」447「塩 <sup>シ</sup>世倭」と、「オ」に8例用いられている。このように、同じ音訳漢字が「オオ」にも「オ」にも多用されるため、「オオ」と「オ」との区別がなされていない。

ロンドン本では、僅か3例だが、「オオ」の音訳に「倭吾」を用いたのは、「オオ」と「オ」とを区別しようとする意図の現れとしてみることができる。ただし、この場合も、上記の「莫」「多」などと同様、少数の例に止まっている。しかも、「大→オオ～」という共通項をもつ訳語の内、「倭～」が「倭吾～」に改められていない例も多い。「大路→」「大門→」「大→」の「倭吾～」に対し、11「大風→」17「大雨→」25「雪大→」162「大表→」327「大人→」510「大紅→」などは「倭～」のままになっている。

同じことは上述の「多」についても言える。「多」(ト)の用例は全て人物門に集中しているが、人物門では「～人→～ヒト」の音訳は、327「大人→」331「少人→」339「貧人→」340「従人→」341「富人→」では「～非多」に改められているのに対し、311「人→」336「好人→」338「悪人→」では「～非都」のままになっている。

### 2.3.2. 「乃」の場合

表3が示す通り、『日本館訳語』では、「ノ」の音訳漢字として「那 [nuo]」が圧倒的に用いられている。ロンドン本では、「乃」の用例も3例(「天上 <sup>ソラ</sup>唼乃唼密」、<sup>ソラ</sup>「天下唼乃世莫」、<sup>ソラ</sup>「天涼唼乃孫司世」)見られる。この3例は天文門の32～34に集中している。

「乃[nai]」は、ロンドン本以外のテキストでも見られる音訳漢字だが、30「星少 <sup>ホシ</sup>波世索谷 <sup>ソク</sup>乃」367「無 <sup>ム</sup>乃」369「少 <sup>ソク</sup>索谷 <sup>ソク</sup>乃」371「忙 <sup>ヒマ</sup>非馬莫 <sup>ヒマ</sup>乃」400「買賣 <sup>アキ</sup>阿急 <sup>アキ</sup>乃」で「ナイ」に5例と、21「無雨 <sup>アメ</sup>阿密 <sup>アメ</sup>乃世」23「無風 <sup>カゼ</sup>刊節 <sup>カゼ</sup>乃世」29「無星 <sup>ホシ</sup>波世 <sup>ホシ</sup>乃世」で「ナ」に3例用いられている。[-ai]という有韻尾の字は韻尾[-i]を利用して「ナイ」の音訳に用いられるのは問題がない。一方、韻尾[-i]を捨象して「ナ」列の音訳に用いられるのは問題だが、「蓋[kai]」(546「外 <sup>ホカ</sup>活蓋 <sup>ホカ</sup>也」)なども見られることから、後続が前寄りの母音であるため、「乃」の韻尾が目立たなくなったからだと考えられ、説明がつく。が、「ノ」への音訳については適切な説明が得られない。

「莫」など、ここまで見てきたロンドン本の独自の用字法の多くに、音訳を改善しようとする意図が見られるが、すでに「ナイ」と「ナ」の音訳に使われている「乃」をさらに「ノ」の音訳に用いたこの用法は明らかにそうした意図から逸脱している。そもそも、「ノ」の音訳には円唇性母音の字が要求されるが、「乃」はこの条件には合致していない。『日本館訳語』の基礎音系である当時の北方方言では「乃」の音価が[nai]と推定されており、「忙マ非ヒ馬マ莫マ乃ノ」などの用法もこれを証明している。また、諸方言にあたっても円唇母音を有する「乃」が見当たらない。

「ノ」の音訳になぜ適切とは思えない「乃[nai]」が用いられたかを問題にした場合、考えられる可能性の一つは「乃」とその日本語の読みとの関連である。即ち、「乃」を「ノ」に当てた人は、「乃」という漢字の日本語の読み「ノ」を知っていたということである。

この推測が事実ならば、この3例に見られる「乃」の用法はいわば日本語の読みに従って日本語を写したもので、当時の中国語の発音に基づいて日本語を漢字で写す同書の音訳方針に反している。従って、「ノ」の音訳に「那」の代わりに「乃」を用いたのは、本来正しかった音訳をかえって誤ってしまったやり方であり、前掲の先行研究の指摘する「国語に極めて忠実なもの」とは言えないことが明白である。

### 2.3.3. 「泥」の場合

「ニ」の音訳に用いられる「泥[ni]」もロンドン本にしか使われていない音訳漢字である。

他本では、「ニ」の音訳には「尼[ni]」(16例)が用いられているが、ロンドン本では、その内の2例(59「国クニ谷ニ泥」、67「地方チホ谷ニ泥」)に「尼」とは声母も韻母も同じ「泥」が使われている。

この「泥」の用法については、前掲の大友(1963)に、「音注振りは、国語に極めて忠実なもの」の一つとして挙げられているが、「尼」との関係については触れられていない。

福島(1993:p. 108)は、

「泥」は、『中原音韻』の齊微韻の平声陽niである。

と指摘し、「尼」とは同音であることを示唆している。確かに、『中原音韻』の「齊微韻・平声陽」では、「泥」と「尼」は同じ小韻にあり、同音の関係にある。

しかし、『中原音韻』では「泥」には二つの読みがあり、「齊微韻・平声陽」の他に、「齊微韻・去声」にも出ている。「泥」に二つの読みがあるという事実は、『中原音韻』より百年以上も後の — 『日本館訳語』の成立時期により近い — 『韻略易通』などにおいても確認されている。ただし、「泥」の場合は、二つの読みの違いは声調の違いであり、その違いによって何を示そうとするのかについては今後の課題となる(注8)。

### 2.3.4. 「肖」の場合

「ショウ」の音訳漢字として用いられる「肖[siau]」もロンドン本にしか使われていない音訳漢字である。

他本では、「ショウ」(全5例、99「正月 燒哇的」<sup>シャウグワチ</sup> 282「胡椒 谷燒」<sup>コショウ</sup> 453「麵 燒夫」<sup>フ</sup> 461「花椒 三燒」<sup>サンショウ</sup>)の音訳漢字として、「燒[jiau]」のみが用いられているのに対し、ロンドン本では、その内の1例に「肖」(460「花椒 三肖」<sup>サンショウ</sup>)が使われている。この「肖」も大友(1963)に、「音注振りは、国語に極めて忠実なもの」として挙げられているが、「燒」との関係については触れられていない。

「肖」と「燒」とは、韻母も声調も同じだが、声母は異なっている。『日本館訳語』の「シ、シュ、シュウ、ショ」の音訳漢字として、「世」(4「星 波世」<sup>ホシ</sup>)、「申」(319「正使 申司」<sup>シンヌ</sup>)、「升」(102「四月 升哇的」<sup>シグワチ</sup>)、「受」(315「秀才 哇嗑受」<sup>ワカシユ</sup>)、「少」(252「卓 少谷」<sup>ショク</sup>)など、いずれも声母[-]を有しているので、「燒」を「ショウ」に当てるのに、何ら問題ないことが明白である。一方、494「詩 習」の「習[si]」に見られるように、声母[s-]をもつ字による用例が少数ながら存在していることから見て、「肖」を「ショウ」の音訳とするのも決して不当とは言えない。何故「燒」の代わりに「肖」を用いたかは当面不明とせざるを得ない。

### 3. おわりに

以上、ロンドン本に見られる独自の用字法の具体例について逐一検討してきた結果、「莫」「多」「司」は、北方方言の話し手にとって、曖昧になりがちなウ列とオ列、「米」はイ列とエ列との、区別を明確にするために用いられたものであり、改善は不完全ながら、その意図は認めざるを得ないことが明らかになったと言える。「倭吾」の用法も同様な意図に基づいて行われたものであろう。

独自の用字法が施された用例については、先行研究の指摘する「それぞれに音注するに正に妥当なものばかりである」のではなく、日本語の音訳が改善されたものが多いが、徹底されていない上、「マ(イ)」に「莫[muo]」(他本は「馬[ma]」)を、「ツ」に「多[tuo]」(他本は「都[tu]」)、「ノ」に「乃[nai]」(他本は「那[nuo]」)を用いるなど、行き過ぎた訂正となってしまった例も含まれおり、この他に、「泥」「肖」のように更なる研究が待たれる例も存在している事実が明らかになった。

注1 丙種本には日本語を含め、朝鮮、琉球、安南、占城、暹羅、韃靼、畏兀兒、西番、回回、滿刺加、女直、百夷など、13以上の言語との対訳集があると見られている。

注2 四本の収録館数は下記のように一様ではない(○は存、－は欠を示す)。

	朝鮮	琉球	日本	安南	占城	暹羅	韃靼	委兀兒	西番	回回	滿刺加	女直	百夷
ロンドン本	○	○	○	○	○	○	－	○	－	○	○	－	○
静嘉堂本	－	－	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
阿波国本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
稲葉本	○	○	○	○	－	○	○	○	－	－	－	－	○

この他に、台湾珪庭出版有限公司が1979年に影印出版した『(火源深訳 第伯符輯)華夷訳語』本と韓国ソウル大学中央図書館本がある。両本とも、占城、西番、回回、女直、百夷の5館を欠いている。日本館については稲葉本と同様、器用門から人物門にかけ23項目が欠落している。この他、ハノイ遠東博古学院と水戸彰考館にも『日本館訳語』があったが、彰考館本は昭和二十年に焼失し、ハノイ本は所在不明となっている。

注3 静嘉堂本に関しては、他の対訳集にも欠落語が見られる。『韃靼館訳語』には14語(石田1944:p. 55)、『回回館訳語』には18語(本田1963:p. 221)、『安南訳語』には28語(陳1967:p. 25)、がそれぞれ欠落している。稲葉本は12行本で、器用門から人物門にかけて欠落した23語と人物門の門名を合わせると丁度1丁(両面)が欠落したことになる。

注4 阿波国本の巻首に、茅伯符(1601年の進士)の所輯とする茅子蕃(1595年の進士)の撰した序文があるが、石田(1930:p. 20)によって、この序文は、茅伯符の『皇明象胥録』についていた序文と全く一致するだけでなく、その筆者も呉光儀であって、茅子蕃ではないという事実が明らかにされた。

注5 この他の主な研究として、浅井恵倫(1940)「校本日本訳語」、浜田敦(1940)「国語を記載せる明代支那文献」、渡辺三男(1960)「華夷訳語および日本館訳語について」などがある。

注6 当時の北方方言では、b, p, m, f, t, n, lなどを頭子音にもつ音節においては、-u:-oの対立はなく、-u:-uoの対立しかなかった。-u:-oの対立より、-u:-uoの対立の方が両者の差がより小さいことは明白である。

注7 「乚」が使われた用例で、難解なものがある。「蓮花 法司乚那法納」「蓮子 法司乚那各」はその例である。大友(1963)は「ハスミノハナ、ハスミノコ」、福島(1968)は「ハスエノハナ、ハスエノコ」、福島(1993)は「ハスメノハナ、ハスメノコ」と読んでいる。この2語における「乚」の読み方については、今後の課題としたい。

注8 「泥」の用法については、分布の面で注目すべき点がある。59「国 谷泥」、67「地方 谷泥」が所在するロンドン本2ウの最初の行に、56「泥 各轟祿」という語がある。56の「泥」のイメージを引きずりながら、後続の59「国 クニ」と67「地方 クニ」に対し、本来「谷尼」とあるべきところの「尼」を「泥」と書いてしまったという可能性も一応考えてみる必要がある。なお、2ウでは「ニ」の用例はこの59、67の2例のみである。

## 参考文献

浅井恵倫(1940)「校本日本訳語」(『安藤教授還暦祝賀記念論文集』所収 三省堂)

石田幹之助(1944)「所謂丙種本『華夷訳語』の『韃靼館訳語』」(『北亞細亞学報』第2輯 亜細亞文化研究所)

伊波普猷(1932)「『日本館訳語』を紹介す」(『方言』第2巻第9号)

- 大友信一(1963)『室町時代の国語音声の研究(第四章)』(至文堂)
- 大友信一・木村晟(1968)『日本館訳語本文と索引』(洛文社)
- 京都大学文学部国語国文学研究室(1968)『纂修日本訳語』(京都大学国文学会発行)
- 蔣垂東(1996)「ロンドン大学本『日本館訳語』の識語をめぐって」(『筑波日本語研究』創刊号)
- 蔣垂東(1997)『『日本館訳語』のエをめぐって』(『筑波日本語研究』第2号)
- 陳荊和(1967)「安南訳語の研究(三)」(『史学』第40巻第1号)
- 浜田敦(1940)「国語を記載せる明代支那文献」(『国語国文』第10巻第7号)
- 福島邦道(1968)「纂修日本訳語(解題)」(『纂修日本訳語』所収)
- 福島邦道(1993)『日本館訳語攷』(笠間書院)
- 北京大学中国語言文学系語言教研室(1989)『漢語方言字匯(第二版)』(文字改革出版社)
- 本田實信(1963)『『回回館訳語』について』(『北海道大学文学部紀要』11)
- 陸志章(1947)「記徐孝『重訂司馬溫公等韻図経』」(『燕京学報』第32期)
- 渡辺三男(1960)「華夷訳語および日本館訳語について」(『駒沢大学研究紀要』第18号)

#### 付 記

本稿は国語学会平成六年度秋季大会にて行った研究発表(の後半部)をもとに考察を加えたものです。稿をなすにあたっては発表当時及び各機会を通じて多くの先生方より貴重なご教示を賜りました。記して厚く感謝の意を表わします。

(1998年9月22日 受理)